

伊勢物語
勢物語
勢物語
勢物語

日本古典全書

監修

佐佐木信綱
柳田國男

新村出
和辻哲郎

津田左右吉

伊竹
勢取
物物
語語

南波
浩校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書第九十六回配本

「竹取物語・伊勢物語」南波浩校註

昭和三十五年七月一日初版發行

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 四〇〇圓

目次

竹取物語

解説

新しいジャンルの發生

三

物語の名稱

五

成立時期

五

成立基盤

一八

研究文獻目錄

五

凡例

七

本文

七

② かぐや姫のおひたち

七

二、妻どひ

七

三、難題

一〇

(1) 佛の御石の鉢 (石作の皇子)

一〇

(2) 蓬萊の玉の枝 (車持の皇子)

一三

(3) 火鼠の皮衣 (阿倍の右大臣)

一三

作者論

三

物語文學の享受者層

三

古本系傳本について

三

竹取物語の創造性とその本質

四

(4) 龍の首の珠 (大伴の大納言)

一〇

⑤ 燕の子安貝 (石上の中納言)

一〇

四、御狩の御幸

一五

⑤ かぐや姫の昇天

一五

六、不盡の煙

一六

補註

附説 難題と五人の貴族名との關聯性……………

一六

伊勢物語

一六

解説

一七

歌物語の性格……………

一七

伊勢物語の形成過程——形態的考察……………

一八

作者の主體精神——内容的考察……………

一八

伊勢物語の傳本……………

一九

塗籠本の史的意義……………

二三

新資料民部卿局筆塗籠本について……………

三三

伊勢物語の意義……………

三三

主要註釋書目録……………

三五

塗籠本伊勢物語年譜……………

三五

凡例

三五

本文

三五

底本

定家本

底本

定家本

1 昔男ありけりうひかふりして……………

二五

2 昔男ありけりみやこのはじま

二五

りける時……………

二六

3 三 むかしをとこありけりけさう

二六

4 昔東五條におほきさひの宮の

三六

おはしましける……………

三六

5 五 むかし男ありけりひんがしの

三六

17	一七	昔紀有常といふ人ありけり………	16	三六
16	一六	昔みちのくにに男すみけり………	15	三五
15	一五	昔男みちのくにへいきありきけるに………	14	三四
14	二四	昔男みちのくににすずるにいたりにけり………	13	三三
13	二三	昔むさしなるをとこ京なるをむなのもとに………	12	三二
12	二二	昔男ありけり女をぬすみてむさしの國へゆく………	11	三一
11	二一	昔男有けりあづまへゆきける………	10	三〇
10	一〇	昔男むさしのくにまどひありきけり………	9	二九
9	九	むかし男ありけり其男みはよなき物におもひ………	8	二八
8	八	昔男ありけり京にありわびて………	7	二七
7	七	昔をとこありけり女をぬすみていてゆくみちにて………	6	二六
6	六	昔男有けりをんなのゑあふまじかりけるを………	5	二五
5	五	五條わたり………	4	二四
4	四	昔年ごろをとづれざりける人………	3	二三
3	三	昔なまごころあるをんなありけり………	2	二二
2	二〇	昔男みやづかへしける女ごだちなりける人を………	1	二一
1	二一	昔男やまとにある女をよぼひてあひにけり………	0	二〇
	二三	昔男女いとかしこう思かはし………		一九
	二四	昔はかなくてたへにける………		一八
	二五	むかしいなかわたらひしける人のこども………		一七
	二六	昔男かたゐるなかにすみけり………		一六
	二七	昔男ありけりあはじともいはざりける女の………		一五
	二八	昔男人のむすめのもとに………		一四
	二九	昔いろごのみなりける女………		一三
	三〇	二條後の春宮のみやすどころとまうしける頃………		一二
	三一	昔をとこはつかなりけるをむなに………		一一
	三二	昔男みやのうちにて………		一〇

31 三二 昔男つにくにうばらのこをり

にすみける女に……………33 二九二

32 三三 昔男つれなかりける人の……………34 二九三

33 三四 むかし男心にもあらでたゑに

ける女のもとに……………35 二九三

34 三五 昔わすれぬなめりととひごと

しける女のもとに……………36 二九四

35 三六 昔男いろごのみなりける人を

かたらひて……………37 二九四

36 三七 昔紀有常物にいきて……………38 二九五

37 三八 昔わかきをとこけしうあらぬ

人をおもひけり……………40 二九六

38 三九 昔女はらからふたりありけり……………41 二九七

39 四〇 昔男好色としるくをんなを

あひしれり……………42 二九八

40 四一 昔かやうのみことまうすみこ……………43 二九九

41 四二 昔あがたへゆく人にむまのは

なむけせんとて……………44 三〇〇

42 四三 昔みやづかへしける男……………45 三〇〇

43 四四 昔すきものところば多あり……………45 三〇一

(底本四四段なし)(定家本、昔男いとうるわしき友あり)(46)

45 四五 昔男ねんごろにいかでとおも

ふ女ありけり……………47 三〇二

46 四六 昔をとこありけりものへゆく

人に……………48 三〇三

47 四七 昔男いもうとのをかしげなる……………49 三〇三

48 四八 昔男ありけり人をうらみて……………50 三〇三

49 四九 昔男人前救うゑけるに……………51 三〇五

50 五〇 昔男在けり人のもとよりかざ

りちまき……………52 三〇五

51 五一 昔男ありがたかりける女に……………53 三〇六

52 五二 昔男つれなかりけるをんなに……………54 三〇六

53 五三 昔男ふして思をきておもひ……………56 三〇六

54 五四 昔人しれぬものおもひけるを

とこ……………57 三〇七

55 五五 昔ころづきなまいろごのみ

なる男……………58 三〇七

56 五六 昔男ありけりみやづかへもい

そがしくて……………60 三〇九

57 五七 昔つくしまでいきたりける男

ありけり……………61 三〇〇

58 五八 昔年來をとろへざりける……………62 三〇〇

59	五九	昔よごころあるをむな……………	63	三二
60	六〇	昔男をむなをみそかにかたら ふわざもせざりければ……………	64	三四
61	六一	昔みかどのときめきつかはせ たまふをむな……………	65	三五
62	六二	昔男つのくににしろ所あり……………	66	三八
63	六三	昔男いづみの國にいきけり……………	68	三九
64	六四	昔男ありけり伊勢國かりのつ かひにいきけるを……………	69	三九
65	六五	昔男かりのつかひよりかあり けるに……………	70	三三
66	六六	昔男伊勢齋宮に内の御つかひ……………	71	三三
67	六七	昔そこにありとききけれど……………	73	三三
68	六八	むかし女をいたくうらみて……………	74	三四
69	六九	昔男伊勢國なりける女にまた もゑあはで……………	75	三四
70	七〇	昔男伊勢國なりける女をまた はゑあはで……………	72	三五
71	七一	昔二條のきさきの春宮の御息 所と申けるころ……………	76	三六
72	七二	昔きたのみこと申込みこいまそ		
73	七三	昔うじの宮にみこうまれたま ゑりけり……………	79	三八
74	七四	昔をとろゑたるいゑに……………	80	三九
75	七五	昔ひだりのおほひまうちぎみ……………	81	三九
76	七六	昔ふかくさの御門のせりかは のみゆき……………	114	三〇
77	七七	昔これかたときこゆるみこ……………	82	三一
78	七八	昔をなじみこかたのにかりし ありき給けるに……………	82	三三
80	七九	昔水成瀬にかよひ給惟高のみ こ……………	83	三四
81	八〇	昔男ありけり身はいやしなが らははみこなりけり……………	84	三五
82	八一	昔男ありけりわらはよりつか ふまつりけるきみ……………	85	三六
83	八二	昔いとわかき男わかき女をあ ひいゑりけり……………	86	三六
84	八三	昔男つの國むばらの郡あしや の里に……………	87	三六
85	八四	昔いやしからぬ男それよりま		

86	八五	さりたる人を……………	89	三二
87	八六	昔つれなき人をいかでと……………	90	三三
88	八七	昔月日のゆくさ多なげく男……………	91	三四
89	八八	昔こひしさにきつつかゑれど……………	92	三五
90	八九	昔男みはいやしなから……………	93	三六
		昔二條のきさひのみやにつかふまつるをとこ……………	95	三六
91	九〇	昔男ありけり女をとかふいふこと……………	96	三七
92	九一	昔ほりかはのおほあまうちぎみ……………	97	三八
93	九二	昔をきおとときこゆる……………	98	三九
94	九三	昔右近馬場のひをりの口……………	99	四〇
95	九四	昔男弘徽殿のはざまを……………	100	四一
96	九五	昔男みこたちのせうあうしたまふ所に……………	106	四二
97	九六	昔なまあてなる男のもとに……………	107	四三
98	九七	昔をなむ人のところをうらみ……………	108	四四
99	九八	昔男ありけりうたはえよまざりけれど……………	102	四五
100	九九	昔男ありけり深草御門に……………	103	四六
101	一〇〇	昔ことなる事なくて……………	104	四七
102	一〇一	昔男かくてはしぬべしと……………	105	四八
103	一〇二	昔男ともだちの……………	109	四九
104	一〇三	昔男忍てかよふをむなあり……………	110	五〇
105	一〇四	昔男やむぐとなき女に……………	111	五一
106	一〇五	昔をとこねんごろにいひちぎれる……………	112	五二
107	一〇六	昔をとこやもめてゐて……………	113	五三
108	一〇七	昔男ひさしうをともせで……………	118	五四
109	一〇八	昔をむなあだなるをとこの……………	119	五五
110	一〇九	昔いとわかき人にはあらぬ……………	88	五七
111	一一〇	昔男をむなのいまだよにへず……………	120	五八
112	一一一	昔男むめつぽより雨につれて……………	121	五九
113	一一二	昔男契事あやまてる人に……………	122	六〇
114	一一三	昔男契事あやまてる人に……………	123	六一
115	一一四	昔男いかなる事ぞおもひけるをりにや……………	124	六二
116	一一五	昔男みやこをいかがおもひけむ……………	59	六三

竹
取
物
語

南
波
浩

解 說

新しいジャンルの發生

「物語文學」は、平安朝社會が生み出した、新しいジャンル（文藝形態）である。そして源氏物語繪合卷には、竹取物語をさして「物語のいできはじめの祖」おやと記してゐる。新しいジャンルの發生は、この國でも、どの時代においても、一作家の思ひつきによるものではない。一見すぐれた天才的作家の獨創によると見えたり、あるひは時の經過による自然成長のやうに思はれるものも、實際は、その時代の人間生活や享受者（聞き手や讀者たち）との合法的なかはりによる時代の要求が、作者主體とかかはり合つて、生み出されるものである。

たとへば、社會の秩序の中に矛盾があらはれ、その社會の中にそれに對する對立や批判や疑惑が生まれ、人々の社會的意識に變化がきざし、そのやうな矛盾に對應してゆくためのいろいろの要求が生じてくる動き、そのやうな要求を反映し、あるひはそのやうな要求を豫知して、作家主體の中にもこれに呼應する動

きがあつて、作家の意識内でいろいろの葛藤を経た結果、その呼應條件を十分に満足させるやうな既成のジャンルがない場合に、はじめて新しいジャンルが生みだされる。それは歴史社會の社會意識としての要求、それを媒介する享受者たちの要求と、作者自體の中のそれに呼應する意識の動きとが、一つになつて生みだすものである。

しかも、新しいジャンルは、いつの場合も、既存の文藝遺産と無關係に飛躍的絶縁的に形成されるものではなく、既成の文藝遺産の形態・手法・構成・意識等の、部分的あるひは多面的な、攝取や止揚によつて形成される。だから、ここに「物語文學」といふ新しいジャンルの元祖と言はれる竹取物語においても、それは單に古代傳承の自然成長的なものではなく、その時代の新しい歴史社會的要求と作者自體の歴史社會的内的文學的葛藤を経た、舊文藝形態の否定的契機をもつて生まれ出たものであり、その否定的契機となつたものが、どのやうなものであつたか、またそれが文學史の流れにおいて、どのやうな意義をもつものであつたかが明らかにされねばならない。とともに、その形象化の結果としての作品が、どのやうな歴史社會の、どのやうな現實を、どんな立場から、どのやうに藝術作品として形象し、作者はそれにどのやうに對處し、自己の人生をどのやうに生きて行かうとしてゐるかを讀みとらねばならない。そしてその形象成果としての作品が、文學史の上にどのやうな意義をもち、文學としてわれわれにどのやうな感動を與へ、それが今日のわれわれにどのやうな意義を投げかけてゐるかを汲みとりたい。

× 物語の名稱

今日われわれが「竹取物語」と呼んでゐるこの作品は、古くは「竹取の翁」（源氏物語繪合卷）と呼ばれ、また「かくや姫の物語」（源氏物語蓬生卷・顯昭六百番歌合陳狀）とも呼ばれてゐた。ところが鎌倉時代になると、無名草子ではただ「竹取」と略稱し、**風葉**和歌集ではかくや姫の歌を載せて「たけとりのかくや姫」といふ風に、「かくや姫の物語」の呼稱が後退して竹取の方が主位に立ち、室町時代にも正徹物語や室町末期書寫の久曾神本など、やはり「竹取」と略稱してゐる。また一方、南北朝時代の河海抄には「竹取翁」と記し、室町末期天正廿年書寫の武藤本の外題には、中院通勝が「竹取翁物語」と記してをり、その後も元祿頃の書寫本と言はれる前田善子氏藏本や群書類従本、古活字十行本、文政九年の田中大秀の「解」等にも「竹取翁物語」としてゐるから、「竹取の翁の物語」といふのが標準の呼稱であつたと思はれる。しかし一般的には「竹取」といふ略稱、および「竹取物語」と言ふ通稱が弘布して今日に至つてゐる。

成立時期

物語文學の元祖と言はれる竹取物語は、何時ごろ作られたものであらうか。今日傳へられるやうな竹取物語が出来あがる前に、その原形とも言ふべきごく簡素な古い竹取説話があつたらうといふことは疑ひの

餘地がない。それは今昔物語・海道記・詞林采葉抄等に傳へられる竹取翁の話が、かならずしも竹取物語の内容系統を引くものでなく、別系統の説話のあつた事を推定させるからである。さらにまた、平假名が流布しない頃にすでに漢文又は漢字和漢文で書かれた竹取説話（たとへば浦島子傳・續浦島子傳・伊香小江説話・奈具社説話等のやうな）があつたのではないかといふ事が、江戸時代になつて土肥經平の「春湊浪話」卷一、加納諸平の「竹取物語考」などに説かれ、故武田祐吉博士なども「竹取物語新解」でこれを説かれてゐる。これらは注目すべき重要な推論であるが、現在まだ十分な實證資料は整つてゐない。

けれども、今日の竹取物語がけつして原形説話のままでなく、一定の時代において假名物語の元祖といはれるだけの創造的發展を遂げたものであり、それが爾後部分的な改變を経ながら今日に至つたものであることは、確認してよい。

右のやうな事情を前提としながら、竹取物語の内容にふれた古文獻、たとへば、大和物語七七段の源喜種の

たかとの夜々に泣きつとどめけむ君は君にと今宵しもゆく

の歌や、宇津保物語初秋（一本内侍督）の卷の、

「この月には十五夜にかならずお迎へをせむ。この調べを、かかる事のたがはぬ程に、かならず十五夜にと思はしたれ」内侍のかみ「それはかぐや姫こそ侍ふべかなれ」上「ここにはたなはたおくりて

侍らむかし」内侍のかみ「子安貝は近く侍はむかし」

の記事、あるひは源氏物語繪合せの卷の、

「まづ物語のいではじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合せて争ふ。(左)『なよ竹の世々にふりにけること、をかしきふしもなけれど、かぐや姫の、この世の濁りにもけがれず、はるかに思ひのぼれる契り高く、上世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし』といふ。右は『かぐや姫の昇りけむ雲居は、げに及ばぬ事なれば、誰も知りがたし、この世の契りは竹のなかに結びければ、くだれる人の事とこそ見ゆめれ。一つ家の内は照しけめど、百敷のかしこき御光には並ばずなりにけり。安倍のおほしが千々の黄金をすてて、火鼠の思ひ、片時に消えたるも、いとあへなし。車持のみこのまことの蓬萊の深き心も知りながら、偽りて玉の枝にきずをつけたるを、あやまちとなす。繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之書けり。……』といふ。」

などの記事を見る時、それらは現行竹取物語の内容と、ほぼ異同のないものである事が認められる。従つて現行の竹取物語からその成立時期を考へても、さして危険はないと思はれるのである。

そこで参考として、竹取物語の成立時期について論じた諸學者の結論の主なものをあげると、左表のごとくである。

年號	西紀	推定時代	論者	掲載書	日
大同	八〇六	大同→延喜の間	田中大秀	『竹取物語解』	
弘仁	八一〇	弘仁元年→延喜元年の間 弘仁二年→十四年の間 弘仁二年→延喜の間	市古貞次 春山頼文 井上頼文 武田祐吉	『同 全釋』 『同 新釋』 『同 新解』	
		同 右	手塚昇	新潮社『日本文學講座』	
		弘仁三年以後二、三年の間	岡部美二	『古典研究』五卷一二號	
		弘仁三年以後	藤卷櫻邨	『竹取物語新釋』	
承和	八三四 八四七	承和以前 承和以後→延喜の間	加納諸平	『竹取物語考』	
			奥津春雄	『國文學研究』十一輯	
貞觀	八五九 八七六	貞觀以前 貞觀年中 貞觀八年以後 貞觀十七年	入江昌熹 五十嵐政雄	『竹取物語抄』頭註 『竹取物語裏解』	
			西郷信綱	評論社『日本文學』一號	
			岡一男	『古典と作家』・『竹取物語評釋』	
			五十嵐力	『平安朝文學史』上	
元慶	八八七 八八四	貞觀十一年→元慶三年	神田秀夫	『日本文學の諸相』	